

判定をした結果、全体の60%に相当する21症例にその有用性が認められた。病変別にみると、とくに歯頸部知覚過敏症の疼痛緩和に有用であった。また、本剤の使用は薬剤との併用により、さらにその有用性が増すという結果が得られた。

今回の検索から、口中包帯は、口腔領域に生ずる疼痛を伴う病変の症状軽減、とくに外来刺激の遮断という見地からは有効であるという結果が得られた。しかしながら、使用法や適用感などについては、さらに改良の余地があるのではないと思われる、今後他大学の検索結果との比較を試みながら、検討を進めたいと考えている。

演題10. お歯黒使用者の口腔内状態

○江連 徹, 神 達宏, 池田 政明
天日 常光, 田口 博康, 斉藤 設雄
桂 啓文, 鈴木 哲男*

岩手医科大学歯学部歯科理工学講座
雫石町開業*

現在、お歯黒をしている人を見る機会などは皆無に等しい。実際、明治時代に発令された禁止令により次第に消失していった。しかし、歯科医学の見地に立ってみると、お歯黒をしていた人に齶蝕が少ないのは昔より言われてきた事であり、近年、その主成分であるタンニンに注目した山賀らはH-Y剤を考案し、現在それは臨床に広く浸透している。演者らは今でも実際にお歯黒をしている女性を知り、今回、口腔内を診査する機会を得たので、その概要を報告する。

症例は93歳の女性。既往歴、家族歴ともに特記事項なし。全身状態良好。歯科治療の経験は有り、アレルギー等はない。また、お歯黒は18歳で嫁いで以来塗布を続けており今年で75年になる。

口腔外所見：特記事項なし。

口腔内所見：1) 歯牙所見…残存歯は $\frac{26}{26}$ の26本で、うち45は残根状態であるが、他の歯牙には齶蝕は認められなかった。また、右側臼歯部に著明な咬耗が認められ、全歯にわたり軽度の動揺が認められた。

2) 軟組織所見…粘膜には異常を認めなかった。歯肉状態は軽々度の歯周炎に罹患しており、 $\frac{1}{1}$ に顕著な歯肉退縮が認められた。

3) X線所見…全体として若干骨吸収が見られる。

特に6|遠心部に著明な吸収が認められる。

93歳という高齢にもかかわらず、これだけの口腔内状態を呈するのは、もちろんこの方の口腔清掃、環境、体質が関与しているが、やはりお歯黒(タンニン酸第二鉄)による齶蝕予防剤としての役割に起因する事が大であり、今後、調査研究を続けていく必要があると思われる。

演題11. 顎機能異常者の心身医学的特性に関する検討—エゴグラムを中心として—

○本田富美子, 土門 宏樹, 菊地 賢
高瀬 真二, 川田 毅, 佐藤 修子
高橋 欣也, 三善 潤, 沖野 憲司
深沢太賀男, 森岡 範之, 石橋 寛二

岩手医科大学歯学部歯科補綴学第二講座

顎機能異常とは、顎関節や咀嚼筋などの機能障害により生ずる病態をさす。顎機能異常の症状としては、顎口腔系の疼痛、下顎の運動障害、運動時の関節雑音などがあげられる。この様な顎機能異常の発症には、咬合異常が直接的または間接的に関与している場合も多く、咬合状態を改善することによって症状が軽快することが知られている。一方、本症罹患者と接していると健常者とは明らかに異なった性格特性を有していると感じられることが少なくない。

顎機能異常者の心身医学的特性については、各種の心理テストを用いて、従来より神経症の傾向の有無、社会適応性を中心とした性格特性、不安傾向の有無、抑うつ状態などとの関連性が報告されている。そこで今回私達は心理療法的手段として広く用いられている心理テストの一つ、エゴグラムを用いて、顎機能異常者の心身医学的特性を検討した。また、スプリントの治療効果との関連性についても併せて検討したので報告した。対象は過去4年5カ月の間に当科を受診し顎機能異常と診断され、かつ各種心理テストを施行した患者40名で、そのうち男性は7名、女性は33名であった。顎機能異常者に施行した各種の心理テストのうち今回はエゴグラムのみを検討した。比較のための健常者群は顎機能異常の既往のない本学学生(男性49名、女性32名、計81名)とした。その結果、次のような結論が得られた。

1. 顎機能異常者群のエゴグラムはAを頂点とする山型で特異的なプロフィールは認められなかった。しかし健常者群と比較してFCが有意に低かった。